

(37) 教会の病的野蛮性 (『反キリスト者』の 37)

我々の時代は「歴史的感覚」を誇りにしている。このような時代に、「キリスト教の始まり」に「奇蹟を行う人や救世主の粗雑な寓話」があるということ、そして「すべての霊的なものや象徴的なもの」はその「後の展開」であるというようなことは全く無意味である。キリスト教の歴史は、しかもその「十字架上の死」以来、「根源的象徴主義」の「一步一步より一層粗雑な誤解の歴史」である。なお、このキリスト教が、「一層広範囲の、一層荒削りの大衆」に広がっていくにつれて、キリスト教生誕の諸前提は「大衆」からますます遠ざかり、彼らにとってキリスト教を「卑俗化し、野蛮化すること」が一層必要となった。ⁱ

キリスト教は「ローマ帝国のすべての地下的祭式の教えや儀式」、「あらゆる種類の病的な理性の不合理」を飲み込んだ。キリスト教信仰はこうして「極めて病弱で、極めて低劣で卑俗」となる。そして、ついに「病的野蛮性」が「教会」として「権力」へと結集する。この「教会」こそ、すべての「正直さ」、「魂の高さ」、「精神の訓育」、「率直善良な人間性」に対する「不倶戴天の敵の形式」である。これに対して、われわれ、「自由となった精神」は、この「最大の価値対立」、すなわち「キリスト教的価値」と「高貴な価値」との「対立」を再建したのである。ⁱⁱ

(38) 同時代人に対する軽蔑・嘔吐 (『反キリスト者』の 38)

ニーチェが軽蔑するのは、「今日の人間」であり、彼と「宿命的に同時代(verhängnisvoll gleichzeitig)」である人間である。彼はその「不純な呼吸」に窒息する。「過ぎ去ったもの」には「大いなる寛容」、すなわち「寛大な自制心」をもつ。しかし、「我々の時代」である「近代」に踏み込むや否や、その「感情」は一変し、爆発する。「我々の時代」は「知的」である。そして、かつては「病氣」であったものが、今日では「非礼(unanständig)」となる。今日、「キリスト者」であることは「非礼」であり、ここで「嘔吐(Ekel)」が始まる。かつて「真理」と呼ばれていたものはもはや一つも残っていない。そこでは僧侶が「真理」という言葉を口にすることで堪えられない。ⁱⁱⁱ

今日、「無邪気」から、あるいは「無知」から「嘘をつく」ということはもはや許されない。僧侶も「もはや『神』は存在しない」ということを「知っている」。「『罪人』も『救世主』ももはや存在しない」ということ、そして「『自由意志』、『道徳的世界秩序』は嘘である」ということを誰もが「知っている」。「真剣さ」、「精神の深い自己超克」がこれらのことを「知らない」ということを誰にも許さないのである。^{iv}

「教会」のすべての概念は、「最も悪意のある贋金づくり」である。それは「自然価値を無価値にすること」を目的とする。また「僧侶」とは「最も危険な種類の寄生虫」、「生の本来の毒蜘蛛」である。このような「教会」と「僧侶」とによる「不気味な捏造」が、「彼岸」、「最後の審判」、「魂の不死」、「魂そのもの」であり、それらの概念によって「人類の自己侮辱」が達成され、それを目の当りにして「嘔吐」がもよおされる。それらは「拷問の道具」であり、それによって「僧侶」が支配者となる「残虐性の体系」である。^v

今日では誰でもこのことを「知っている」。それにもかかわらず、一切が昔のままである。

政治家たちは、普段は極めて囚われのない種類の人間であり、行動のうえでは徹底した「反キリスト者」であるが、今日なお「キリスト者」と称し、「聖餐式」に出かけている。「礼節」や自己自身への尊敬」という「最後の感情」はどこへ行ってしまったのか。今日のすべての「実践」、「本能」、「価値評価」は「反キリスト教的」である。それにもかかわらず、「近代人」は『キリスト者』と称して恥じることがないのである。かれらは「虚偽の出来損ない」である。^{vi}

(39) ただ一人のキリスト者 (『反キリスト者』の 39)

「キリスト者」はただ一人しかいなかった。その人は十字架につけられて死んだ。その時「福音」は十字架上で死んだ。この瞬間から以後「福音」と呼ばれたものは、彼が生きたものとは反対のものであった。すなわち、それは「悪しき知らせ」、「禍音(Dysangelium)」であった。「キリストによる救いの信仰」のうちに「キリスト者のしるし」を見ることは、無意味な誤りである。ただ、「キリスト教的実践」、すなわち十字架上で死んだ人が生きたような「生」のみが「キリスト教的」である。「純粋なキリスト教」、「根源的キリスト教」は「信仰」ではなく、「行為」である。^{vii}

実際のところ「キリスト者」はいなかった。二千年来「キリスト者」と呼ばれてきた者は単なる「心理学的自己誤解」に過ぎない。「キリスト者」のうちで支配していたのは「本能」に過ぎない。ルターの場合でも、「信仰」とは「本能」がその背後に隠れて演技をしている「マント、口実、垂れ幕」であった。「信仰」とは「本能」の支配についての「狡猾な盲目」であり、「本来のキリスト教的狡猾さ」である。人々は「信仰」について語りながら、いつも単に「本能」から行為しているのである。^{viii}

キリスト教が表象する世界で、「現実」に触れているものは何もなかった。むしろ、「現実に対する本能一憎悪」がキリスト教の根元において「駆り立てる唯一の要因」であった。ここから出る結果は、「錯誤」が「徹底的」であり、「本質を規定するもの」、「実体」であるということである。あらゆる事実のなかで最も異様な事実は、キリスト教が「錯誤」によって制約されているということのみならず、ただ「有害な錯誤」において、また「生を毒し、心を毒する錯誤」において「天才的宗教」ですらあるということである。このような事態も「高みから見れば(aus der Höhe gesehn)」、依然として「神々のための芝居(ein Schauspiel für Götter)」である。その「神々」とは「哲学者」であり、有名なナクソス島でのディオニュソスとアリアドネの対話で出会った「神々」である。^{ix}

ⁱ Ibid., 37, S.208-209

ⁱⁱ Ibid., 37, S.209

ⁱⁱⁱ Ibid., 38, S.209-210

^{iv} Ibid., 38, S.210

^v Ibid.

vi Ibid., 38, S.210-211

vii Ibid., 39, S.211

viii Ibid., 39, S.212

ix Ibid.